



# さわら人権啓発だより

発行:早良区人権啓発連絡会議/事務局:早良区生涯学習推進課/電話:833-4401/FAX851-2680

早良区人権啓発連絡会議は、各校区の人権尊重推進協議会、自治協議会等の各種機関・団体の代表者で構成しています。私たちは、あらゆる差別をなくすために、地域ぐるみの自主的な推進組織、校区人権尊重推進協議会等の活動に取り組み、区民の人権意識の高揚を図り、差別のない明るいまちづくりを目指して活動しています。

今年度は、早良市民センターにて、区人権講座(6月、10月、11月、1月の計4回)、早良区人権を考えるつどい(7月)人権を尊重する市民の集い(12月)を開催しました。映画以外の講演会については、講師のご厚意により録画配信を実施しました。この「さわら人権啓発だより」では、令和7年11月と令和8年1月の人権講座についてご紹介します。

## 第4回 早良区人権講座

福永宅司の「涙と笑いの人権講座」

講師:福永 宅司さん

開催:令和8年1月31日(土)

参加:会場220名、配信148回



福永宅司さんは、22年間福岡市の小学校教諭を勤め、退職後も学力保障、人権教育、マイノリティーの子どもを見失わない教育などにに関わり活動している。

### 講演要旨

福岡市内の小学校の先生を22年間やらせてもらって、とても楽しかった。天職だと思いながら、やってきました。

一人芝居を始め、先生の仕事、プラス土日は一人芝居という生活となり、一人芝居と教育講演に専念することに。7年前からは、不登校のお友達を預かるフリースクールを始めました。それから、ずっと早良区で頑張っています。

本日の一部は「ぬくもりある地域」の話です。どんな地域がぬくもりがあるのかというのは決まっているんです。

一番辛い立場に置かれそうな人が幸せそうにしている。これが一番ぬくもりのある、力のある地域なんです。人権のまちとか、ぬくもりあるまちというのは、簡単に言えば、一番辛い立場に置かれそうな人が幸せだって、このまちに生まれて幸せ、そういうことだと思います。

ぬくもりある地域は、一番厳しい人を見捨てません。学校教育と同じ。厳しい子ども、一人の子どもを見失うと、教育は光を失うと言うんです。「教育の父」と呼ばれるペスタロッチさんの言葉ですが、いい言葉だと思います。

ぬくもりある地域のヒントとして、映画の主人公、あのフーテンの寅さんなんかいいなと思うことがあるんです。

山田洋次監督って、単なる喜劇はつくらない、ちゃんとメッセージがあるんです。

高度経済成長で豊かになったかもしれないけど、人間関係は…。隣は誰か知らない人が住んでて全然繋がらなくて…。どんどんマンションが建って、故郷の風景が変わって…。それでいいの?って。

そこで渥美清さんが演じる寅さんの登場です。忘れてはいけないものを持ってね。あの人は人が悩んでたら奮闘努力します。自分のことを忘れて、俺が応援するよって奮闘努力するんです。あの寅さんの姿、辛い人を一人も見捨てないという姿を私たちは見ていたんです。

21世紀も26年、過去を振り返りながら、地域の繋がりが見直される時に来ているんじゃないか、と思います。

本日の二部は、一人芝居のコーナーですが、皆さんが「想像力」を働かせて観るとというのが、一人芝居の醍醐味。「想像力」って、大事なんです。差別を叩き壊す力だもの。見えないものを見る力、心の痛みを想像する力です。

### 一人芝居の舞台を終えて

福永宅司

さまざまな事情で義務教育を受けられなかった人たちが、大人になって学び直しに来る夜間中学。

時に自尊感情が低くなる生徒たちに勇気を与えていく主人公、黒井先生を名優西田敏行さんが演じている。

「こんな難しい勉強できないよ。私バカだから」と泣き出す生徒オモ二に、「オモ二のどこがバカなんだ。その腕で焼肉屋繁盛させて子どもたちを見事に育て上げた。それがバカにできるか?」と思わず大きな声になる。

山田監督の映画「学校」は、当時教員だった私の心に沁みだ。生徒の暮らしの背景に寄り添い人生を支えようとする黒井先生の姿に涙し、いつしか椅子一つで、この映画を一人芝居という形で表現するようになった。

この作品には、今のこの時代でも決して失ってはいけない教育へのメッセージが込められている。

時は流れ60代になった私だが、若い先生方へ今もそのメッセージを届けている。「この先生と出会って幸せになれるかもしれない」と生徒に思われる存在になってほしい、その思いでこれからも一人芝居「学校」を演じ続ける。

多様性 受け入れ広がる 豊かな未来  
(百道浜小学校6年生)

考えよう 自分の言葉 相手の気持ち  
(西福岡中学校2年生)

変わるのを 待つのを やめて 変えていく  
(原中学校3年生)



百道浜小学校5年生

人権尊重週間 早良区入選作品

## 第3回 早良区人権講座

### 映画「夕陽のあと」

DV、乳児遺棄、養子縁組などを描いた人間ドラマ

開催:11月20日(月)10時~、14時~

参加:午前291名、午後281名

#### 夕陽の島で交差する、2人の「母」の物語

鹿児島県最北端の長島町。穏やかな海と夕陽に包まれたこの島を舞台に、映画『夕陽のあと』は静かに始まります。食堂で働きながら地域の子もたちを見守る佐藤茜と、夫とともにブリの養殖業を営み、7歳の里子・豊和(とわ)を育てる五月。血のつながりのない子どもをわが子として迎えようとする五月の期待は、ある事実によって大きく揺らぎます。豊和を7年前に東京で置き去りにした実の母親が、島で働く茜だったことが明らかになるのです。

#### 見えてくる、孤立と貧困の現実

物語は、養子縁組をめぐる対立を軸に進みながら、現代社会が抱える複雑な問題を浮かび上がらせていきます。



(C)2019長島大陸映画実行委員会

茜が置かれていたのは、DVや貧困、孤立という厳しい現実でした。助けを求めすることもできず、追い詰められた末の選択。その背景を知ろうと東京を訪れた五月は、制度のはざまに取り残されてきた茜の人生に触れます。映画は、乳児遺棄という出来事を決して単純化せず、「なぜそこまで追い込まれたのか」という問いを見る者に投げかけます。そこに描かれるのは、特別な誰かではなく、私たちの社会のすぐそばにある現実です。

#### 「正しさ」では割り切れない葛藤

『夕陽のあと』は、誰かを一方的に裁く映画ではありません。血のつながりを持つ母と、育ててきた母。互いの苦しみがあつかり合い、夕陽の海に向かって2人が抱き合う場面は、言葉にならない感情を胸に残します。どちらの思いも切実で、どちらにも「正しさ」がある。その葛藤の中で、私たちは自分自身に問いかけることとなります。子どもの最善の利益とは何か。支援は本当に必要な人に届いているのか。家族とは、血縁とは何なのか。答えを示さないからこそ、この映画は見終わった後も静かに心に留まります。

#### 暮らしの中にある人権を見つめて

本作を市民向け人権啓発事業として上映したことは、大きな意味を持ちます。SNSや子どもの人権をテーマとした講話と同様に、この映画もまた、私たちの日常に潜む人権課題に光を当ててくれました。人権は遠い世界の出来事ではなく、身近な暮らしの中にあります。誰かの苦しみに気づくこと、想像すること、支え合うこと…。その一つひとつが、人権を守る第一歩です。『夕陽のあと』は、そんな当たり前の大切さを、静かに、そして確かに伝えてくれる作品でした。

(早良区人権教育推進員 西園 勝憲)

令和8年度も講演会をはじめ、映画上映を予定していません。ぜひ、ご参加ください。

## 令和7年度 早良区 人権を考えるつどい・人権講座等 実績【会場:早良市民センター】

### 第1回人権講座

テーマ:「私らしく神社と生きる」

講師:紅葉八幡宮 禰宜

平山 道宜さん

開催:6月19日(木)

参加:会場263名

配信293回



### 人権を考えるつどい

映画:「52ヘルツのクジラたち」上映

開催:7月10日(木)

参加:午後500名

夕方280名

### 人権を尊重する市民の集い

テーマ:「深刻化するネットいじめ その現状と大人の役割」

講師:ジャーナリスト・メディア教育評論家 渡辺 真由子さん

開催:12月9日(火)

参加:会場154名、配信201回



### 第2回人権講座

「手話でつながるメッセージ

『SDGs 誰一人取り残さない社会へ』

講師:一般社団法人福岡市ろうあ協会事務局長 吉野 幸代さん

手話劇:福岡県立福岡高等聴覚特別支援学校 生徒さん一同

開催:10月14日(火)

参加:会場373名、配信(講演のみ)183回

